

PLによる上級日本語学習者の指導
TEACHING ADVANCED JAPANESE LEARNERS
USING PEER LEARNING METHOD

—日本語上級教科書を使用したPLによる
日本語指導の分析と成果及び学習者の習得の関係—

池原明子, 日本経済大学経営学部
Akiko Ikehara, Japan University of Economics (JUE)

1. はじめに

語学上達の要件は様々であるが、まず、学ぶことを楽しめること、そのための条件として、

- ① 上達の過程が認識できる。具体的には前回できなかったことが、できるようになったなど。
- ② 自らの誤り（発音・文法・語彙認識）の自覚とその訂正、改善ができ、それが認識できる。

さらに

- ③ 互いに競争し、励まし合える仲間がいる。などが挙げられる。

この条件を満たす教授法として、大学の日本語上級クラスの日本語の指導にピア・ラーニング（Peer Learning以後PL）を取り入れた。

ここ20年、ピア・ラーニング（PL）は日本語の指導に有効な教授法として取り入れられ、その学習効果が指摘されている。

PLとは対話を通して学習者同士が互いの力を発揮し、協力して学ぶ学習方法であり、協働、人と人が互いの力を出し合い、協力して創造的な活動を行うことである。（舘岡2015）読解や作文の課題を遂行することによって、スキルを向上させるという狭義の目的と、仲間と一緒に学ぶことによって社会的な関係を構築し、自己の考えを検討、視野を広げ、自己発見するという広義の目的がある。現在まで、作文指導における、ピア・レスポンス（池田1999、2004、岩田・小笠2007他）、ピア・リーディング（舘岡）ピア・リスニング（横山2009）などの日本語教育の多くの分野に於いて実践報告がなされ、その成果が実証されている。

筆者は2000年から、短期（1年）集中日本語コースの非漢字圏の学生を対象に、仮名学習、漢字学習、日本文化の指導へPLを取り入れることによる成果をみてきた。非漢字圏の学習者はPLに対し好意的であり、積極的に取り組む傾向があり、成果が上がるという報告がなされており、上記の実践に於いても成果がみられた。しかし、アジア系学習者については、学習者はピア・レスポンスに対して否定的だという報告（田中・北1996、Mangelsdorf 1992）や、相反して、ピア・レスポンスの活動の分析の結果、アジア系・非アジア系混合のピア・レスポンスで両者に違いはなかったという報告もある（池田2000）。アジア系学習者を対象

にPLを導入した場合、どのような成果が挙がるのか、教授法としてのPLが有効に働くのかについては、アジア系学習者、特に中国人学習者、韓国人学習者を対象にした実践報告はなされているが、アジア系の多国籍の学習者を対象にした実践報告はあまりない。

本稿は、大学の基礎教科の日本語という枠内で、大学の方針に基づき、決められた教科書を使い、決められたシラバスに沿って日本語指導を行うという条件の下で、多国籍アジア圏の上級学習者を対象にPLを導入することで、どのような成果が上がるのかを検証するのが目的であり、2年間に亘って行った、PLによる日本語指導の実践報告である。

2 実践の概要

アジア圏、多国籍、上級レベルの学習者を対象に、本校に於いて使用が決められているテキスト、及び副教材（経済用語）をPLによるクラス活動を通して進めていくことによる、2年間の成果、特に各学習者、及び実践共同体としてのクラスの変容をみていく。

このクラスは本学の基礎教科の日本語で、週2回、必修のクラスであり、日本語上級レベルの学習者を対象としている。クラスの名称は日本語IVとVである。

（日本語クラスは日本語I～Vまであり、IV、VがJLPテストN1レベル、上級者のクラスとなっている。）

PLの活動は学習者をペア又は、3人のグループとし、なるべく国籍、言語が違う相手と組むようにしたが、中国からの学習者が多く、いくつかのペア、グループは中国人同士の組み合わせとなった。

2.1 実践の期間、クラス名、学習者、学習者の日本語能力

2013年度春学期（2013年4月～9月）日本語IV

◆クラス参加者：学習者 27名 中国 17名 韓国 6名 ネパール 1名
ベトナム 1名 台湾 1名 ウイグル 1名

学習者の日本語能力：JLPテストN1 8名 N2 19名

2013年度秋学期（2013年10月～2014年3月）日本語IV

◆クラス参加者：学習者 27名 中国 17名 韓国 6名 ネパール 1名
ベトナム 1名 台湾 1名 ウイグル 1名

学習者の日本語能力：JLPテストN1 8名 N2 19名

2014年度春学期（2014年4月～9月）日本語V

◆クラス参加者：学習者 18名 中国 11名 韓国 5名 ネパール 1名

台湾 1名

学習者の日本語能力：JLPテストN1 5名 N2 13名

* 学習者全員が2013年度日本語Ⅳを履修した学生である。

2014年度秋学期（2014年10月～2015年3月）日本語Ⅴ

◆クラス参加者：学習者 18名 中国 11名 韓国 5名 ネパール 1名

台湾 1名

学習者の日本語能力：JLPテストN1 12名 N2 6名

* 春学期N2取得者が7月JLPテストでN1に合格

* 全員が2013年度日本語Ⅴを春学期履修した学生である。

2.2 使用テキストとクラス活動の流れ

2.2.1 使用テキスト

*^{注1} 学ぼう！にほんご 上級（専門教育出版）＜Vol.6＞

2.2.2 使用テキストの構成と活動の流れ

(1) この課を学ぶ前に

各課のテーマについて、学習者はペアの相手、グループのメンバーと話し合い、考えをまとめる。教師は教室内を回り、活動がスムーズに進められているか、確認する。

(2) 新出単語 各項目に入る前に行う。

- ① 教師の読み、発音の導入の後、ペア、グループで、各語の読み、発音を確認。
- ② 学習者同士での各語の意味の確認
- ③ クラス全体での各語の意味の確認

(3) 本文の新出単語

(2)と同じ手順で行う。

(4) 重要な文型と表現の練習

- ① 教師の導入の後、ペア、グループで、文法項目、例文の確認。
- ② 各学習者は各自、練習問題をする。

- ③ ペア、グループで各練習問題の確認
- ④ 板書によって、クラス全体での文法項目と練習問題の確認
- (5) 読んでみよう (ピア・リーディングで)
 - ① 段落毎に教師・学習者による追従読み
 - ② 段落毎にペア、グループで、内容・文法項目・語彙の確認。
 - ③ クラス全体での内容・文法項目・語彙の確認。
- (6) 質問 (ピア・リーディングで)
 - ① 学習者は各自質問を解答
 - ① 各質問についてペア、グループで話し合い、本文内容の確認。
 - ② 板書によって、クラス全体での内容の確認。特に答える際の文末の確認。
- (7) まとめよう (ピア・リーディングで)
 - ① 学習者は各自「まとめよう」の空欄を補充していく。
 - ② ペア、グループで「まとめよう」の各空欄に入れた語、語句の対話による確認。
 - ③ 板書によって、クラス全体での「まとめよう」の各空欄に入れた語、語句の確認。
- (8) みんなで話そう
 - ① ペア、グループで各課の内容・自分の考え、自分の国について対話する。
 - ② ペア、グループで課のテーマに関連するグラフ・表の資料から分かることなどについて対話する。
 - ③ クラス全体で、グラフ・表の資料から分かることを確認。
- (9) 聞く練習 (CDは①で1回目、②で2回目、③で3回目、計3回聴く)
 - ① 学習者は聴解問題を聴いて、各自質問の解答を考える。
 - ③ ペア、グループで各聴解問題の解答を対話によって確認。

- ④ 板書によって、クラス全体で聴解問題の解答確認。

(10) 語彙を増やそう

- ① 教師による各語の読み方、発音の導入。
- ② ペア、グループで各語の読み方、発音、語彙を対話によって確認。
- ③ ペア、グループで各練習問題の解答を対話によって確認。
- ④ クラス全体で練習問題の解答確認。

(11) 総合発展練習（ピア・レスポンスで）

- ① ペア、グループで対話によって各自の考えをまとめると同時にペア、グループの考えをまとめる。⇒確認。
- ② 各自、作文作成後、ペア、グループでピア・レスポンスによって作文を検討。
- ③ 検討結果を考慮し、作文を清書し提出

2.2.3 実践期間と内容

2013年度春学期・秋学期（2013年4月～2014年3月）日本語Ⅳ

- ・「学ぼう！にほんご」上級 Vol.6
- ・副教材

経済用語（「新日本語分野別重要単語」から経済用語のみ）

経済用語（筆者作成オリジナルプリント、JUE作成経済用語より経済用語読みプリント）

2014年度春学期・秋学期（2014年4月～2015年3月）日本語Ⅴ

- ・「学ぼう！にほんご」上級 Vol.6
- ・副教材

経済用語（「新日本語分野別重要単語」から経済用語のみ）

経済用語（作者作成オリジナルプリント、JUE作成経済用語より経済用語読みプリント）

新聞記事（生教材・生教材を加工したもの）

2年度は各学期1回、新聞記事を分析、発表。

ペア、またはグループ（3人）で1つの記事を担当し、分析したのち、発表する。PLのみで行い、学習者の自律的学習に任せた。

4. 研究方法・分析

本研究の分析資料は(1)学期終了後に行った、アンケート調査、(2) 毎週、各授業後に担当者が書いた授業記録、(3)2年次終了後に行った最終アンケート、(4)2年次終了後のインタビューである。

(1)から(4)の資料を次の観点から分析した。

①学習者はPLによるクラス活動をどのように経験し、認識していたか。

②学習者はPLによるクラス活動を通してどのように学びを実感していたか。

4.1 各学期アンケートの分析

4.1.1 2013年度春学期（2013年4月～9月）（1年生）

全ての学習者がPLでの学習は初めてであり、20%の学習者は教師主導を好み、とまどいも多かったが、最終的には、アンケート回答者、全員が仲間と学習することを楽しいと感じ、教師主導の教授法よりも集中力が増して、力が伸びたと思うと答えている。全員、友だちができた、クラスの雰囲気がよく、クラスに来るのが楽しいと答えている。

アンケート回答者： 27名 中 25名 回答率 93%

中国 16 ベトナム 1名 台湾 1名 ウイグル 1名

韓国 4名 ネパール 1名 ベトナム 1名

主なコメント：

- ・他の国の人と日本語で話すのは面白いです。（韓国）
- ・この授業ほど日本語でたくさん話せたことはありません。（韓国）
- ・みんな積極的に発言してよかったですと思います。（中国）
- ・自分だけで勉強したら集中できなかった。グループでしたから集中できたし、何人も友達になった。（中国）
- ・様々な国の留学生がおるから（いるから）各国の文化や慣習（習慣）なども分かった。（中国）
- ・授業で1人ではなくて、自分のパートナーと一緒に勉強して、1人より効率（効果）がある。（中国）
- ・コミュニケーションができた。（中国）

- ・言葉を学ぶのは楽しいと思った。（韓国）

4.1.2 2013年度秋学期（2013年10月～2014年3月）（1年生）

後半6カ月でPLでの学習にも、慣れてきて、学習者は自律的に学習を進めるようになっている。

アンケート回答者：27名 中 20名 回答率 74%

中国 12名 韓国 4名 ネパール 1名 ベトナム 1名
台湾 1名 ウイグル 1名

主なコメント：

- ・授業の雰囲気がいいし、友達ができた。（中国）友達ができた（中国）
- ・日本語を学ぶだけでなく、それ以上のことを学んだと思います。（韓国）
- ・パートナーが熱心で、分からない言葉や問題を説明してくれた（中国）
- ・クラスメートと一緒に、単語や文の意味を勉強することは面白かった。（中国）
- ・いろいろな国の友達ができ、面白い文化が分かってきた。日本語の能力も上がった。（中国）
- ・一緒に勉強して、自分の不足が分かってきた。（中国）

4.1.3 2014年度春学期（2014年4月～9月）（2年生）

2年目に入り、学習者は積極的にクラス活動に取り組み、楽しんで学習すると同時に仲間との交流を通して、自分の日本語の能力への認識が明確になり、上達したことも認識できるようになってきている。

アンケート回答者：18名 中 17名 回答率 94%

中国 10名 韓国 5名 ネパール 1名 台湾 1名

主なコメント：

- ・この授業だけはコミュニケーションをすることができ、座り、聞くだけではなく、楽しい雰囲気知識を学んで、充実していた。（中国）
- ・1年の時より、授業が面白くなって、日本語の授業が楽しくなりました。（韓国）

- ・外国の人と交流が一番大きい。授業の雰囲気がいいし、発表も緊張しなくてできた。さんよする（参加する）時間が多くて面白いです。（韓国）
- ・自分で勉強するのが好きだけど、友達を作ってよかった。（台湾）
- ・パートナーと一緒に読んだり、問題を解いたり、お互いに勉強できました。力がどんどん上りました（つきました）。（中国）
- ・日本人、韓国人以外の友達ができ、嬉しかった。大学2年間で一番良かったと思う授業であった。（韓国）
- ・クラスで友達ができ、学習の雰囲気がすごく良かった。例えば、クラスに入ったら、家に帰った感じする。（中国）

4.1.4 2014年度秋学期（2014年10月～2015年3月）（2年生）

アンケート回答者：18名 中 17名 回答率 94%

中国 10名 韓国 5名 ネパール 1名 台湾 1名

主なコメント：

- ・対話をしながらするこの授業は会話の練習にもなってよい。（中国）
- ・2年生になると、お互い認識できて、どんどん楽しい雰囲気になりました。日本語の力もつきました。（中国）
- ・みんなでコミュニケーションをとることがいいと思います。私語が多かったと思います。（中国）

5 結果とまとめ

Johnson et al.(1993)は、協働的学習の基本的構成要素として、①相互協力関係、②対面的一積極的相互作用、③個人の責任、④スモール・グループでの対人的技能、⑤グループでの改善の手続きの5つを挙げ、協働学習における情意面と社会面を重視している。

舘岡（2005）は他者とともに、ある共通の目標に向かって協力して、活動するということは他者の気持ちに気づき、互いに信頼しあえる共同体としてのクラス活動が構築されていく。競争的な活動と異なり、協働的な活動はともに学びあえる互恵的な共同体を作ることに貢献する。そのプロセスにおいて、自分以外の人間とどのようにコミュニケーションし、意思決定をしていくのかという社会的関係性が育成されていく、情意的面での効果も大きく、「互いに協働して行うことにより達成感が高まり、楽しさも増大する。」と述べている。

協働的学習からは課題の達成のみではなく、個人の情意面、社会面における発達、さらには集団全体の成長が得られ、自己効力感や学習意欲が高まると同時に、仲間意識や人とのつながり感覚を育て、他者との相互作用の方法や協力のしかた

を学ぶことができることが、今回の実践後のアンケートの結果からも実証されたといえる。

具体的には①チームワークと、互いの協力によって問題解決をした達成感。②他者とのコミュニケーションの方策の会得—他者の意見を聴く、他者への配慮、自分の意見を理解してもらうための努力— ③日本語運用能力の向上とその実感 ④①～③の総体としての自己の成長—特に自分の力の不足の自覚—があげられる。

2年目終了後のアンケート調査結果によると、学習者は、1年次前半には、20%が教師主導のほうがいいと思っていたが、1年次後半から、2年次になると、日本語能力の伸びとともに、何よりも仲間意識が育まれたことを強く認識し、PLによる学習法を評価するように、変容していき、それが、日本語のクラスへの参加を楽しみと感じ、出席率の伸び（2年次の出席率は約「90%」）という結果を導いたと思われる。更に、成績においても、小テスト、学期末テストの結果から、各学習者の成長、伸びが見られた。

6 今後の課題

今回の実践で、各課題の遂行をこなしていく度に、学習者が活動に責任を持ち、積極的に課題に関わるように変容し、仲間意識も育まれていくことが分かったが、学習者の十分なフィードバックの時間を設けることはできなかった。2年間、同じ学習者を対象に行ったことで、ある程度の成果は得られたが、大学の日本語の授業は1年がほとんどであり、6カ月、1年のコースで仲間意識を育て、PLを効果的に行っていくには、その学習者の変容を導く、ファシリテーターとしての教師の役割が大きいといえる。また、自分たちの活動を振り返る、フィードバックの時間を与え、修正していく機会を設けることが必要であり、できうれば、各時間に自分たちの取り組み方に対する振り返りの時間をもうけ、活動過程での早期の問題解決が行えるようにすることである。このことにより、短期間のPLにおいても、成果が得られるようになると思われる。

注1 学ぼう！にほんご 初級1 (Vol.1) N5 レベル

学ぼう！にほんご 初級2 (Vol.2) N4 レベル

学ぼう！にほんご 初中級 (Vol.3) N3 レベル

学ぼう！にほんご 中級2 (Vol.4) N2 レベル

学ぼう！にほんご 中上級 (Vol.5) N1 レベル

学ぼう！にほんご 上級 (Vol.6) N1 レベル

今回「学ぼう！にほんご 上級 (Vol.6)」をテキストとして2年間使用した。

参考文献

- 館岡洋子 (2015.2) 『日本語・日本語教育を研究する』国際交流基金日本語教育通信
- 館岡洋子(2005)『ひとりでよむことからピア・リーディングへ：日本語学習者の読解過程と対話的学習』東海大学出版社
- 房賢嬉(2010.1)「韓国人中級日本語学習者を対象とした発音協働学習の試み」—発音ピア・モニタリング活動の可能性と課題—日本語教育 144 号 p157-168
- 横山紀子他(2009. 4)「ピア・リスニングの試み」—海外の日本語教育における課題解決の視点から—日本語教育 141 号 p79-89
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holbec, E. J. 1993 *Circles of learning: Cooperation in classroom*. Tokyo: Japan UNI Agency, Inc (杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤 (訳) 学習の輪—アメリカの協働学習入門—二瓶社)